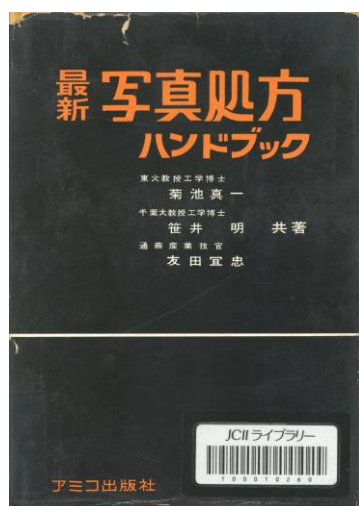
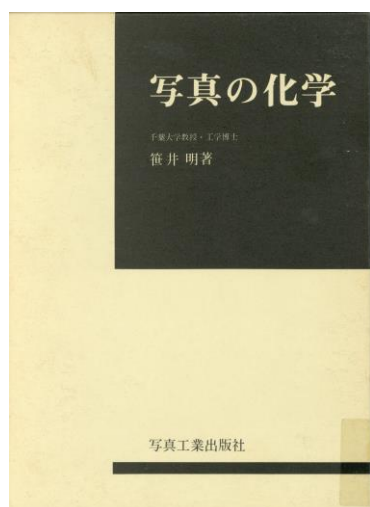


日本カメラ博物館 JCII ライブラリー  
学芸員 宮崎真二

ささいあきら  
笹井 明 (1917-1991) は、1940 年に京都帝国大学工業化学科を卒業後、同校講師、助教授を経て、1952 年に千葉大学工学部工業化学科 (後の画像工学科) 教授に就任しました。千葉大学退官後は日本大学芸術学部写真学科で写真化学を教えるなど、半世紀以上にわたり乳剤と感光、現像処理を中心とした写真化学の研究と教育活動に携わりました。これらの業績が評価され、1990 年に勲三等旭日中綬章を受章しています。



『最新写真処方ハンドブック』



『写真の化学』

著述活動についても、学術書から一般写真愛好家に向けた実用書、写真講座まで幅広く執筆しています。特に基礎あるいは最新の写真化学・技術を、平易な表現で紹介することに重点を置いていました。

雑誌寄稿も数多く、『写真工業』では1961年6月号から「感材シリーズ」を連載開始しています。本連載は、実用的なアマチュア向け感材トピックスおよび実験データに加え、カビ防止、迅速処理、海外製品のテストなど幅広い内容を取り上げて人気を集め、1987年3月号まで300回にわたる長期連載となります。『写真工業』にはその後も寄稿し、1991年6月号に掲載された「感材にあったセーフライトの選択」が遺稿となりました。

単行本は、技術書を中心に50冊以上の書籍を著しています。なかでも薬品処方集に関しては数多く手がけています。一例として、菊池真一・友田宜忠との共著『最新写真ハンドブック』(アミコ出版社・1955年)では、実験により確証を得た当時内外最新の薬品処方をまとめたほか、発行後にもカラー関係や類似処方の追加など増補改訂を行いました。また『写真の化学』(写真工業出版社・1982年)では、大学生をはじめとした写真について学ぶ人に向けて、写真化学と感光材料の評価に関する基礎理論と実際についての基本的事項を解説しています。

このほか、1972年には日本写真学会会長に就任し、同会の創立五十周年記念出版物として企画された『写真用語辞典』(写真工業出版社・1976年)の発行を主導しています。同書は1988年に大幅な増補改定を加え「新版」となりました。

現在はデジタル写真全盛の時代であり、「写真化学」という分野を顧みることが難しくなってきましたが、1940年代から国産のフィルムや印画紙の品質を国際水準以上へと発展させるために基礎研究を続け、1960年代からのカラーフィルム普及期にあたり、補充液を使用して現像処理を化学的にコントロールする方法や廃液の適切な処理方法などを提唱してカラーラボの発展に寄与するなど、笹井の著作からは、日本の感光材料工業の進歩と共に歩んだ軌跡を辿ることができます。